皆さまこんにちは。保土ケ谷公園のサッカー場は毎年、10 月頃を天然芝の養生期間としており、約 1 か月間グラウンドの使用ができません。利用される皆様にとっては大変ご迷惑をお掛けしておりますが、より良いプレー環境を確保するための重要な作業を行っています。今回、この期間に行っている作業内容をご紹介します。

作業の話の前に、天然芝の特性についてお話します。天然芝には大きく分けて 2 種類、「暖地型芝生」と「寒地型芝生」があります。暖地型は日本の暑さにも負けない芝ですが、秋が深まると表層の葉の部分が枯れ春まで休眠してしまいます。一般的な公園の芝生を想像していただけたらわかりやすいと思います。

それに対して寒地型は、冬でも緑を保つ性質を持ちますが、夏の暑さや湿度には弱いという特性があります。そこで、暖地型の成長が緩やかになる秋に寒地型のタネを蒔き育成すると、お互い緑の状態をカバーしあって、グラウンドを一年中緑の状態で保てるのです（休眠している暖地型を保護する効果もあります）。この方法をウィンターオーバーシードといいます。

保土ケ谷公園のサッカー場では、この方法を取り入れており、毎年 9 月末前後の養生期間開始から準備と作業を一気に行っています。秋の養生期間は一年中緑の芝生でプレーできるようにするための重要な期間なのです。一年の中で一番重要といっていいほどのウィンターオーバーシード、次回はその様子をお伝えしていこうと思います。

皆さまこんにちは。前回に続いてウィンターオーバーシードの作業をご紹介します。

・低刈り、バーチカルカット

種を蒔く前に、今ある芝（暖地型）を普段よりもずっと低く刈る作業を行います。また、専用の機械で芝生の根を断ち切り、同時に埋もれていた枯れ芝（サッチ）を掻き出すバーチカルカットを行います。こうすることで、この後蒔く寒地型芝生のタネがしっかりと地面へ届き、発芽するようになります。

▲機械にはたくさんの刃が付いていて高速回転してサッチを掻き出します。

▲バーチカルカットの様子
グラウンドがみるみるうちに枯れ芝（サッチ）で茶色くなっていきます。

・スイーパー（サッチ清掃）

スイーパーという機械を使ってバーチカルカットで出た枯れ芝（サッチ）を回収していきます。

▲スイーパー作業の様子

一面に広がるサッチを回収していきます

▲作業前の状態

▲作業後の状態

これで種まきの準備が整いました。次回はタネ蒔き、施肥、目砂散布をご紹介します。

・タネ蒔き（播種）、すり込み

寒地型芝生のペレニアルライグラスという種類の芝のタネを蒔きます。ブロードキャスターという機械であらかじめ決めた間隔を一定速度で走り、タネが均等に散布されるように注意を払います。偏ってしまうとその後の芝生の状態に直結するので、緊張する作業です。

▲これ全部で 500 kg以上！スーパーの米売り場のようです。

▲緑色の漏斗状の部分にタネが入っていて回転する羽によって広がるように蒔かれます。

タネ蒔きが終わっても作業は終わりではありません。タネがしっかり地面に届くように、ブラシをつけた機械を走らせ芝生の中にすり込みます。

▲芝生の上にまかれた種が乗っています。

▲グラウンドをひたすらぐるぐると走って

しっかりすり込んでいきます。

・施肥、散水

タネにしっかり養分を届けるために施肥（肥料撒き）をしていきます。タネ蒔きの時と同じ機械に今度は粒の肥料を積んで蒔いていきます。施肥の後はしっかりと散水して肥料を溶かします。

▲肥料の粒はタネと違い固いので下手に近づき

すぎると当たって痛いです。

▲施肥の後は時間を空けて何度も散水します。

・目砂散布、すり込み

タネを覆うように目砂を散布します。砂は、激しい試合で転倒してもケガしないよう、小石や貝殻の入っていないきめ細かな川砂を使用します。目砂散布の後は再びすり込みを行い、砂を均等に均していきます。

▲砂もなかなかの量です。

▲目砂散布機で砂を均等に撒いていきます。

▲そして再びすり込んでいきます。

これでようやくウィンターオーバーシードの作業は終了です。といってもタネが芽吹き成長するまでに何度も散水をしたり、成長の悪いところにはタネを追い蒔きするなど、芝が育ちきるまで観察を続けながら追加の作業を随時していきます。そして約１か月で成長した芝生をきれいに刈込み、ようやく養生期間を終了します。

この後も芝の成長の様子をお届けしようと思いますので、それまで楽しみにお待ちください！